

平成30年6月6日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03154

研究課題名(和文)ベルクソン『物質と記憶』の総合的研究 国際協働を型とする西洋哲学研究の確立

研究課題名(英文)A Comprehensive Study of Bergson's Matter and Memory

研究代表者

平井 靖史 (Yasushi, Hirai)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：40352223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：「時間論の観点から心の哲学を解明する」というベルクソン『物質と記憶』の着想は長らく難解とされてきたが、近年著しい発展を見せた「意識の諸科学」や「分析形而上学」の発展を踏まえることで、その内実を具体的な水準で明らかにできた。この取り組みのため、狭義の哲学者だけでなく、神経科学者、病理学者、人工知能研究者などの研究者らを取り込んだ新しい学際的な研究ネットワークの構築が不可欠であったが、「意識と時間」という『物質と記憶』に固有な明確な論点を定めることで、この研究体制は最大の成果を得ることができた。三度の国際シンポジウムは論集としてすでに二冊が既刊であり、三冊目も2018年度中に出版予定である。

研究成果の概要(英文)：The core idea of Bergson's major work "Matter and Memory", approaching the philosophical problems of mind from a perspective of time, has long remained obscure and enigmatic. Thanks to the recent development in the sciences of consciousness as well as in the analytic metaphysics, its theoretical potentialities and advantages were ready to be revealed in many productive aspects. By setting a clear focus onto the relation of consciousness and time, which is peculiar to "Matter and Memory", our multidisciplinary research network, including not only philosophers, but also neuroscientists, pathologists, researchers of artificial intelligence, aesthetics, psychology, ethics, etc., have achieved remarkable results as efficiently as possible. The two first international symposia have already published as two proceedings and the third will also be published in 2018.

研究分野：哲学

キーワード：哲学 時間 ベルクソン 人工知能 意識 神経科学

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) フランスでの Worms の活躍を筆頭として再評価が始まって以降、ヨーロッパにとどまらずアメリカ・アジアの研究者たちを巻き込みベルクソン研究は哲学者の生前の受容の状態を髣髴とさせる活況を呈しており、さらに広範な国際研究ネットワークの充実が急務であった。

(2) 『物質と記憶』の問題系に関する新たな見地からの研究が相次いでおり、今回の研究代表者の交代は、同著作への関心の高まりの中心となる若い世代の研究者を一層積極的に巻き込むためにも必要であった。

2. 研究の目的

本研究では、以前の科研で形成されたベルクソン研究グループの再組織化を図りつつ、ベルクソン最大の名著『物質と記憶』を総合的に研究する。「総合的」というのは、(1)世界的な受容の様態をそれに見合った規模で概観する基礎的課題、(2)『物質と記憶』が提起する諸問題の多面的な分析によって、ベルクソン研究の世界的な動向に積極的な関与を試みる中心的課題、そして(3)西洋哲学研究のあり方そのものについての問題提起を試みる発展的課題を、本研究は兼ね備えていた。

3. 研究の方法

【(1)テキストの方法的複合性】ベルクソンの第二名著である『物質と記憶』(1896年)は、彼独自の【時間論】の観点から、形而上学の伝統的な大問題である【心身問題】に切り込むという、きわめて独創的な論述形式を持つ。しかも、単なる思弁によってではなく、心理学・生理学・生物学・物理学などの徹底的な吟味を通じて理論構築する「実証的形而上学」を目指すものであったが、その斬新さと論点の錯綜のため、解釈と受容は難航を極めていた。

【(2)学際的究明の必要性】ここ数十年の脳科学・生物学・物理学といったいわゆる【意識の諸科学】、そしてあらたに台頭した【分析形而上学】において、心・意識と時間との密接な関係についての知見が飛躍的に深まったことにより、ベルクソンのアイデアを分析的に解明する概念的道具立てが揃ってきた。そこで、こうした各分野の最新の成果を踏まえつつ、『物質と記憶』の徹底的な吟味を行うことで、単に思想史的な意義を確定するのみならず、心と意識をめぐる現今の諸論争のただ中にベルクソンの時間論的アプローチをよみがえらせ、そこに新たなパースペクティブをもちこむことを目指した。

【(3)テキストの内容的複合性】『物質と記憶』は、以下の四章および結論からなる。第1章：知覚と世界の間を身体行動の生態学的システムという見地から解明

第2章・第3章：記憶と再認の生理学研究に基づく、独自の時間論の導出

第4章：心身二元論統合に向けての形而上学的分析

【(4)多角的研究体制の構築】こうした複合的な構成を取るテキストの核心的なアイデアを最大の効率で解明していくためには、以下の3つの基軸で研究を深化する必要があった。

テキストの内在的読解・思想史的解明意識の諸科学・分析形而上学の最新知見との突き合わせによる論点整理
人工知能学・美学・倫理学などへの積極的な応用的展開

【(5)研究の目的との対応】上記(4)のとは研究目的の(1)に、とは研究目的の(2)に、そしての有機的連携による研究体制の構築そのものが、研究目的の(3)に対応する。

【(6)実現上の工夫】これらの要求を満たすべく、従来の狭義のフランス哲学研究における国際シンポジウムの制約を取り払って、基本使用言語を英語とし、実際に狭義のベルクソン研究者ひいては哲学研究者の枠を超えて他分野から積極的に招聘し、事前の問題調整とテキスト共有・長時間の質疑・特定質問を設けることで討議の密度を上げ、スピーディな出版によってこの新しいアプローチを広く世に問う方法をとった。

4. 研究成果

【(1)三度の学際的国際シンポジウム】上述の方法に基づき、三年間の研究期間の各年次に、それぞれ全3日に及ぶ大規模な国際シンポジウムを開催し、『物質と記憶』をめぐる上述の新しい議論枠組みを具現化した。実際に招いた研究者は、フランス哲学・分析形而上学など哲学の分野だけでなく、生態学知覚論・認知科学・脳神経科学・社会心理学・医学・人工知能学など多岐に及んだ。事前の入念なコミュニケーションにより『物質と記憶』の具体的な争点を共有したことで、異なる学問分野と方法論を跨いでも、効率的で集中的な討議を行うことができた。

【(2)「拡張ベルクソン主義」マニフェスト】この新しい研究体制は、2015年度に開催した第一回目の国際シンポジウムから功を奏し、参加したフランス人研究者たちの力強い賛同を得て、著名なベルクソン研究者であるポール＝アントワーヌ・ミケルとエリー・デューリングによる「拡張ベルクソン主義」マニフェストの執筆というかたちで結実した。

【(3)書籍公刊による総合】三回の国際シンポジウムは、それぞれ発表された全ての論考に加えて、上記のマニフェスト、特定質問をもとにして論考同士の繋がりを示すコラム、特定の問題を掘り下げるリプライ論

文、多くの争点をより明確にするための豊富な訳注と索引を加えた形で、三冊の書籍として公刊されている(三冊目は2018年中に刊行予定)。

【(4)個別論点の掘り下げ】三回の国際シンポジウムで、基調的な方向性を打ち出すのみならず、個別論点の具体的な掘り下げのため、国際理論心理学会(ISTP)、科学哲学会、応用哲学会、時間学研究所、ベルクソン哲学研究会、人工知能学会など、数多くの学会・研究会にて発表・ワークショップを重ねている。関連イベントとして、2017年4月にはまた、2015年度登壇者にしてマニフェスト執筆者の一人であるエリー・デュリングを招き新しい実在論の動向をめぐったワークショップを開催した。最終年度には、日仏哲学会にて総括ワークショップも開催し、成果と発展的射程について議論を深めた。

【(5)英語圏への展開】プロジェクト全体を通じて中心的な役割を果たした一人が、ここ10年ほどで急速に研究が深まった【時間経験】の分野の中心人物である英国の哲学者バリー・デイントンの三年連続の参加である。意識の時間的延長が、単に見かけのものではなく実在的なものとする彼の【延長主義】の立場は、物理世界から意識の発生を生体システムの時間的延長から導こうとするベルクソンの【汎質論】と極めて親和性が高く、未分節であった諸論点の明晰化に大きく貢献した。彼自身のベルクソンへのコミットは、2017年出版の『ラウトリッジ時間経験の哲学ハンドブック』という極めてメジャーな論集に、彼の執筆によるベルクソンのチャプターが掲載されるという形で結実している。また、英語版論集出版のために不可欠な上述「拡張ベルクソン主義マニフェスト」の英訳も、彼から申し出てくれ、すでに完成している。

【(6)フランスへの逆輸入】2017年度にはベルクソン研究の重鎮であるフレデリック・ウォルムスを招き入れ、従来の研究との発展的総合を試みた。日本で生まれたこの新しい「拡張ベルクソン主義」の枠組みをここで終わらせることなく持続的に発展させるべく、すでにいくつかの提案がなされている。フランスでの国際ジャーナルの発刊はその1つであるが、ポール＝アントワヌ・ミケルとエリー・デュリングによって2019年度にフランスでの国際シンポジウム開催も計画されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

— 平井 靖史、「時間の何が物語りえないのか—ベルクソン哲学から展望する

幸福と時間」、『物語と時間(時間学の構築II)』(時間学の構築編集委員会・編)恒星社厚生閣、査読なし、2017年、pp. 37-58。

— 藤田 尚志、「ベルクソンからハイデガーへ：リズムと場所(内在的感性論と内在的論理学)」、『西日本哲学年報』25巻、査読なし、2017年、pp. 117-139。

— Hisashi Fujita, “Bergson(-ism) Remembered: A Roundtable,” *Journal of French and Francophone Philosophy - Revue de la philosophie française et de langue française*, 査読なし、2016, pp. 221-258.

〔学会発表〕(計16件)

Shin Abiko, “L’image de humanité, selon Comte et Bergson”, 国際ワークショップ「コント実証哲学の二つの顔」、法政大学、2017-12-16.

Yasuhiko Sugimura, “The Self-Awakening (jikaku) of Pure Memory. An (Over) interpretation from the Position of Nishida’s Philosophy of Absolute Nothingness”, 国際シンポジウム『物質と記憶』を再起動する、京都大学、2017-10-29.

Yasushi Hirai, “Defining Mind-Time Problem”, 国際シンポジウム『物質と記憶』を再起動する—拡張ベルクソン主義の諸展望、明治大学、2017-10-27.

Shin Abiko, “La méatphysique positive”, 国際シンポジウム『物質と記憶』を再起動する、法政大学、2017-10-26

Yasushi Hirai, “Bergson’s Panpsychism and Memory Dualism” in Workshop “The Problems of consciousness in French philosophy tradition, ranging from Bergson to Merleau-Ponty”, International Society for Theoretical Psychology 2017, Rikkyo University, 2017.08.22

Yasushi Hirai, “Privative Emergence of Consciousness: Bergson’s Temporal Extension Model” in Workshop “Better have a stream of consciousness than a sea of unconsciousness: Exploring early 20th and 21st century perspectives on the science of consciousness”, International Society for Theoretical Psychology 2017, Rikkyo University, 2017.08.21

平井 靖史、「意識の遅延テーゼの行為論的射程—神経科学と人工知能研究による「拡張ベルクソン主義」アプローチ」、応用哲学会 第9回年次研究大会ワークショップ、福山平成大学、2017-4-22.

平井 靖史、「「運動は分割できない」とはどういうことか—ベルクソンの空

間化批判を読み返す」、九州大学 QR プログラム・シンポジウム「『現在』という謎～時間の空間化とその批判～」(立正大学)、2016-12-17。
藤田 尚志、「ハイデガーからベルクソンへ 伸張 (Dehnung) と振動 (Schwung)」、西日本哲学会第 62 回大会シンポジウム《ハイデガーとベルクソン 生の哲学再考》、2016-12-04。
平井 靖史、「時間の何が物語りえないのか—ベルクソン哲学から展望する幸福と時間」、時間学特別セミナー「物語と時間」(山口大学)、2016-11-22。
Hisashi Fujita, “L’avenir de Bergson: La khorologie, le hyper-schématisme et la hantologie dans Matière et Mémoire”, ベルクソン国際シンポジウム: 『物質と記憶』を診断する、2016-11-13。
Tatsuya Higaki, “Why is the Past Preserved in Itself? : On the Multi-layeredness of Matter and Memory”, ベルクソン国際シンポジウム: 『物質と記憶』を診断する、2016-11-13。
Yasushi Hirai, “Tense and Aspect of the Memory under the Temporally Extended Ontology”, ベルクソン国際シンポジウム: 『物質と記憶』を診断する、2016-11-11。
Yasushi Hirai, “What is the thickness of the present? Bergson’s dual perception system and the flow of time” in *The Anatomy of Matter and Memory Bergson and Contemporary Theories of Perception, Mind and Time*, 2015-12-11。
Goda Masato, “Memory and History. Rereading Bergson from Ricoeur” in *The Anatomy of Matter and Memory Bergson and Contemporary Theories of Perception, Mind and Time*, 2015-12-10。
平井 靖史、「因果・時間・同時性」、日本科学哲学会第 48 回大会 WS「哲学的時間論と物理学における時間について、首都大学東京、2015-11-22。

〔図書〕(計 7 件)

S. Abiko, H. Fujita, Y. Sugimura (dir.), *Mécanique et mystique-Sur le quatrième chapitre des Deux source de la morale et de la religion de Bergson*, OLMS, 2018, p1-p279。
S. Abiko, H. Fujita, Y. Sugimura (dir.), *Considérations inactuelles. Bergson et la philosophie française du XIXe siècle*, OLMS, 2017, p1-p318。
平井 靖史・藤田 尚志・安孫子 信編、『ベルクソン『物質と記憶』を診断する 時間経験の哲学・意識の科学・美

学・倫理学への展開』(2017 年、書肆心水、p1 - p381)
平井 靖史・藤田 尚志・安孫子 信編、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する 現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』(2016 年、書肆心水、p1 - p383)
アンリ・ベルクソン、合田 正人・平賀 裕貴訳『笑い』ちくま学芸文庫、2016 年、p1-p238。
金森 修、『科学思想史の哲学』岩波書店、2015 年、p1-p400。
Shin Abiko, Hisashi Fujita, Masato Goda (dir.), *Tout ouvert: l’Evolution creatrice en tous sens*, OLMS, 2015, p1-p294。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
<http://matterandmemory.jimdo.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平井 靖史 (HIRAI, Yasushi)
福岡大学・人文学部・教授
研究者番号: 40352223

(2) 研究分担者

安孫子 信 (ABIKO, Shin)
法政大学・文学部・教授
研究者番号: 70212537

杉村 靖彦 (SUGIMURA, Yasuhiko)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号: 20303795

合田 正人 (GODA, Masato)

明治大学・文学部・教授
研究者番号：60170445

檜垣 立哉 (HIGAKI, Tatsuya)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：70242071

藤田 尚志 (FUJITA, Hisashi)
九州産業大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：80552207

金森 修 (KANAMORI, Osamu)
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：90192541 (途中辞退)

(3) 連携研究者

三宅 岳史 (MIYAKE, Takeshi)
香川大学・教育学部・准教授
研究者番号：10599244

伊佐敷 隆弘 (ISASHIKI, Takahiro)
日本大学・経済学部・教授
研究者番号：50274767

郡司 幸夫 (GUNJI, Yukio)
早稲田大学・理工学術院・教授
研究者番号：40192570

兼本 浩祐 (KANEMOTO, Kosuke)
愛知医科大学・医学部・教授
研究者番号：80340298

太田 宏之 (OHTA, Hiroyuki)
防衛医科大学校・医学教育部・助教
研究者番号：20535190

村山 達也 (MURAYAMA, Tatsuya)
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：50596161

永野 拓也 (NAGANO, Takuya)
熊本高等専門学校・共通教育科・教授
研究者番号：80390540

増田 靖彦 (MASUDA, Yasushiko)
龍谷大学・経営学部・教授
研究者番号：50350369

村上 靖彦 (MURAKAMI, Yasushiko)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：30328679

谷 淳 (TANI, Jun)
沖縄科学技術大学院大学・認知脳口ボテ
ィクス研究ユニット・教授

研究者番号：60425634

村松 正隆 (MURAMATSU, Masataka)
北海道大学・文学研究科・准教授
研究者番号：70348168

(4) 研究協力者

三宅 陽一郎 (MIYAKE, Yoichiro)
伊東 俊彦 (ITO, Toshihiko)
谷口 薫 (TANIGUCHI, Kaoru)
宮原 克典 (MIYAHARA, Katsunori)
清水 将吾 (SHIMIZU, Shogo)
石渡 崇文 (ISHIWATARI, Takahumi)
大塚 淳 (OTSUKA, Jun)
長坂 真澄 (NAGASAKA, Masami)
岡嶋 隆佑 (OKAJIMA, Ryusuke)
清塚 明朗 (KIYOZUKA, Akio)
木山 裕登 (KIYAMA, Hiroto)
山根 秀介 (YAMANE, Shusuke)
米田 翼 (YONEDA, Tsubasa)
天野 恵美理 (AMANO, Emiri)
原 健一 (HARA, Ken-ichi)
田村 康貴 (TAMURA, Yasutaka)
齋藤 俊太 (SAITO, Shunta)
持地 秀紀 (MOCHIJII, Hideki)
山内 翔太 (YAMAUCHI, Shota)